

# 男性複数主格・対格語尾 -a, -я について

千葉 萌 一 郎

Об окончаниях -а, -я в именительном и винительном падежах  
множественного числа мужского рода.

Хоитиро Тиба

-Ō 語幹男性複数主格語尾は -i であった。Ōi は一般的に ъ になったが、ъ は語末において短くなり i を生じた, \*rod-oi > rodi, \*vilkoī > vylci. 比較: ギリシャ語 ἴπποι, ラテン語 lupi.

やがて男性複数主格語尾 и はその対格語尾 -ы によって占められ、代って -ы が定着して今日に到った。вълци > вълкы > волки, столи > столы.

しかし私は今ここで、語尾 -ы と並んで存在するアクセントのある語尾 -а について、諸家の説を引用しつつ若干の史的考察を試みたいと思う。

新形態の語尾 -а, -я は、男性複数主格の第三の語尾と称してよい。

лѣси > лѣсы > лѣса, краи > краѣ > краја, вѣци > вѣкы > вѣка.

この新形態の語尾は周知のように、すべての男性名詞を捉えた訳ではない。男性複数主格・対格語尾 -а, -я は、およそ15世紀頃からロシア語方言に現れ、特に16世紀、17世紀にやや広く認められるようになった。この頃にはすでに複数主格形と対格形が一致していたので、対格にも使用された、города поимаша (Лет. Авраамки, 1495年), луга травливали (Акты хоз. боярина Морозова, гр., 1652年). この -а, -я 形態はロシア語の典型的な特徴になった。

ウクライナ語においては語尾 -а, -я は、中性名詞に近い、集合名詞の意味をもった若干の語にだけ存在する, рукава́, вуса́, хліба́, вівса́, очерета́, ліса́, голоса́. このような形態のいくつかは、白ロシア語の文献にも見出される。しかしそれはいずれも借用語である, реастра, привелея, аргумента, догмата. 現代の白ロシア語においては稀れに мужья, цвета, города, труда のような形態も見られるが Е. Ф. Карский はこれを русизм として説明している。

ロシア語においては語尾 -а, -я の形態は、長い時間の過程に個々の語においてのみ定着したが、それはこれ等の形態が緩やかに発展して来たものであることを物語っている。勿論語尾 -а, -я は話し言葉に現れたのであった。最初の例は Н. М. Каринский により «Псковский Шестоднев, 1374年» に見出された, фси бугра, фси путя.

Т. А. Иванова は、事務用文書の広い範囲の文献を渉猟し、15世紀から17世紀に到る文献の中で16例を見出した, глаза, города, жернова, колокола, лѣса, луга, мастера, мѣсяца, образа, рога, снѣга, сторожа, струга, стула, суда, тагана. その中の глаза と рога は双数を意味している。Г. И. Демидова は更にこれに мыта, рукава, вѣса, моста の4語を加えたので、14世紀から17世紀に到る文献の中ではおよそ20語を数えることになった。18世紀においては -а, -я 形態の名詞の数は増大したものの、古い形態は依然として優勢であった。それは今日においても変ることはいない。

М. В. Ломоносов の《Российская грамматика, 1755年》は、最初の規範文法であった。彼は複数主格語尾 *-а* を *рога, бока, глаза* の3語についてのみ定着したものと認めたが、それ以外についてはバリエーションとして扱っている、*береги—берега, луги—луга, лѣсы—лѣса, острова—острова, снѣги—снѣга, струги—струга, колоколы—колокола*。これ等の語のうち *колоколы—колокола* については、性における揺れとして説明することができよう、*колоколь* と *колоколо* との。やがて語尾 *-а* の比較的急速な成長が始まる。

М. В. Ломоносов の《Российская грамматика》よりおくれること75年の1831年に、А. Х. Востоков の《Русская грамматика》の初版が出る。それには語尾 *-а, -я* の定着したおよそ70語の外に、揺れとして多数の語があげられている、*домы—дома, снега—снега, поясы—пояса, повары—повара* 等。今日においては *домы, снега, поясы, повары* の形態は、規範の外に移ってしまった。Пушкин の著作には、語尾 *-а* の一層広い使用が認められる。揺れとして *гробы—гроба* (*гроба с размытого кладбища плывут по улицам*), *волосы—волоса* が、定着したものとして *паруса, мастера* があるが、А. Х. Востоков はその《Русская грамматика》において、これ等 Пушкиn の規範をそっくり定着させている。В. И. Чернышев は《Правильность и чистота русской речи, 1915年》において、*-а, -я* 形態を約200語あげている。更に С. П. Обнорский は、夥しい言語資料、方言資料を研究した結果、約400語例を数えるに到った。А. С. Фидоровская は《Имена существительные мужского рода с формами на *-а* в именительном падеже множественного числа, 1961年》において、600語以上をあげた。

*-а, -я* の形態は極めて迅速に、殆んど全ロシアを席捲したと言っても過言ではあるまい。この形態は北方ロシア語方言並びに南方ロシア語方言の文献に、等しく使用されている。モスクワの文書及び法令集には、常にこの形態が見られる。例外はロシア語方言の西部地帯であって、今日まで *-а, -я* 形態と共に *-ы, -и* の形態も見ることができる、*боки, береги, глаза, снега* 等。ロシア語方言地図によれば、*-ы, -и* 形態を保持する方言は *Севск—Брянск—Вязьма—Сычевка—Новгород* の線より大体西方に寄っている。また、ある他の地域には、島のように散在している。

語尾 *-а, -я* 形態の比較的おくれた出現と、その急速な拡大を考えると、この形態の発生原因を究明することは疑もなく重要である。語尾 *-а, -я* 形態の発生原因については、すでに以前から多くの学者によって研究されて来たが、今これ等の学説を整理するとおよそ次のように要約することができよう。

1) 語尾 *-а, -я* 形態の発生原因は、*господá* タイプの *-а* 語尾女性集合名詞の影響である (А. И. Соболевский)。

2) 語尾 *-а, -я* 形態の発生原因は、複数において、すでに性の統合過程が開始された限り、中性名詞の影響である (И. В. Ягич)。

3) *глазá, берегá, рукавá* タイプの、双数形の影響のもとで形成された、*-а* 語尾双数名詞の影響である (А. А. Шахматов)。

Ф. И. Буслаев は、*-а, -я* 形態は中性集合名詞 *-ие, -ье*, 女性集合名詞 *-ия, -ья*, 特に *-а, -ия, -ья* の影響により生じたと考えた。この説は、А. И. Соболевский により更に発展させられた。

А. И. Соболевский は、古代ロシア語においては *свєя, латина, господа, княжьѧ > князьѧ, братьѧ, зятьѧ* タイプの女性名詞が、集合名詞の意味で使用されていたことを指摘する。しか

もこれ等の名詞は、屢々複数の動詞述語、複数の定語と共に使用されていた、*дружина рекоша, взд два города галичьскыи*。このような一致の結果、上記の名詞はその集合名詞としての意味を、複数に置き替えるに到った。例えば、*господа* は17世紀以来 *господин* の複数主格形として受取られているが、初めは女性単数であって、16世紀初頭のモスクワに関わる文献には、*нашие господы, нашей господѣ* の形で残っている。中性中詞 *каменьѣ, кольѣ* 等も *каменья, колья* に移り、複数を意味するようになった。この形態は、*города, леса* タイプの成立を招いた、とした。

ところがこの説が発表されると、И. В. Ягич が次の理由をあげて反論し、事実矛盾する旨を指摘した。それはまず第一に、何故活動体集合名詞が、不活動体名詞から *-а, -я* 形態を招いたのか理解できない、第二に、*-а, -я* 形態をもつ集合名詞のすべてが、語尾にアクセントをもっているとは限らないのに、*городá* タイプの男性名詞複数主格形は、悉く語尾にアクセントをもっている、として、彼は別個の見解を表明した。《*гóлоса* と *голосá, по́греба* と *погреба́, о́корока* と *окорока́* との相違は、中性名詞における *сло́ва* と *слова́, де́рева* と *дерева́* の同じ相違をはっきりと想起させる。そこでは、中性名詞語尾 *-а* の類推が、*-а* 語尾に影響していなかったであらうか》と反問している。この推察は、И. А. Бодуэн де Куртенэ、Б. О. Унбегаун、Л. А. Булаховский 等多数の学者によって支持されるところとなった。更に Л. А. Булаховский は、語尾 *-а, -я* 形態の発生原因は *берега́, бока́, глаза́, поводá, рога́, рукава́, обшлага́* タイプの双数形名詞であるとの説に対して、大要次のように述べて、中性名詞のアクセントの類推を強調した。

この場合双数形の役割は、極わめて可能性があると思われる。しかし、全く重大な困難がない訳ではない。その中でも最も重要なのは、移動アクセントをもった *-Ŏ* 語幹の双数主格・対格のアクセントの位置である。双数カテゴリー並びに昔のアクセント組織のかすかな痕跡を完全に保持している、生けるスラブ語のうちで、唯一のスロヴェン語の証言に信を置けば、移動アクセントをもった *-Ŏ* 語幹双数主格・対格のアクセントは、語尾に落ちていなかった。つまりこれ等の形態は、単数生格と一致して *\*бѣрега, \*óстрова* であったことを認めざるを得ないであらう。

疑もなく双数形の担い手である代名詞 *оба* のアクセントは、この予想と一致していることであろう。もしもそうであるならば、*бѣрега, глаза́* タイプの双数形の例になれば、常に語尾にアクセントをもつ複数形が、どうして生じ得たであらうか。この場合 Ягич の説に追従して、中性名詞にとって特徴的な類推関係を認める必要がある。即ち、単数生格及びその諸格 *по́ля, по́лю...* と複数主格 *поля́, 単数生格及びその他の諸格 зѣркала, зѣркалу...* と複数生格 *зеркала́* である。中性名詞の類推は、*-Ŏ* 語幹名詞のアクセントの位置の關係に、寄与せねばならなかった。これと平行しているのは、例えば、ウクライナ語の *óстрова* (単数生格) — *остріві* (複数主格), *гóлоса* (単数生格) — *голосі́* (複数主格) 等である。

しかしながら、*-Ŏ* 語幹双数主格・対格におけるアクセントの原初の位置に関する問題は、上述のように、今日まで決定的な解決を見た訳ではない。多くの言語学者はスロヴェン語の論証に反して、*-Ŏ* 語幹双数主格における原初のアクセントの位置は、語末であったとしている。

Л. А. Булаховский は、男性と中性とに性の揺れのある若干の語の比較を求めて、古い形態 *облак* と *облако, колокол* と方言 *колоколо* をあげているが、古代ロシア語において性に揺れのある名詞が存在していた事実もまた考慮に価しよう。*оболокъ (облакъ) — облако, пькъль (пъколъ, пекль) — пекло, сверделъ — свѣрдьло, припѣль — припѣло,*

の間には、長期に渡る断絶があることになるが、それはどのように説明されるのであろうか。

Т. А. Иванова は、双数カテゴリー喪失に関連しての -а 形態成立について新説を立てた。それによると、Н. Ван-Вейк, Л. А. Булаховский と等しく、双数主格・対格においてアクセントは語尾に存在しないと考えた, городá ではなくて гóрода である。Т. А. Иванова は、-а 形態の発生は数詞 два, оба と名詞との結合に関係があるとしている。複数におけるこれ等の結合の理解は、ロシア語においては他のスラブ語におけるようではなかった。数詞 два, оба と結合した名詞は、単数生格として理解されるようになった。その際、同一の事が普遍化の過程として、数詞 три, четыре と名詞との結合にも生じた。しかしながら、長い間この結合した名詞の形態が動揺し、それは単数生格として受取られたし、また古い複数主格・対格としても受取られ、やがて中性名詞までも捉えてしまった。中性においては два, три, четыре мéста と два, три, четыре местá が使用された。中性名詞の類推により два, три, четыре гóрода と два, три, четыре городá が使用され、やがて中性名詞におけるように городá のみとなった。男性名詞 -а 形態は、中性名詞におけるように移動アクセントをもつ名詞の場合にのみ成立した。ウクライナ語及び白ロシア語においてはロシア語と異なり、上記の語結合において形態の相互作用がなかったので、これ等の語には -а 形態の発展が見られなかった。

В. Кипарский が指摘しているように、アクセントのない語尾 -ья は、その出発点として女性集合名詞形をもっており、-а 形態とは全く別個の起原である。この場合、-а 形態が他のスラブ語に拡大しなかった理由が明らかにされない限り、集合名詞形と中性名詞形の影響には依然として疑問が残る。予想される影響の条件は、ウクライナ語にも白ロシア語にもあったのであるから。

以上の見地からすれば、数詞 два, три, четыре と名詞結合の歴史に、-а 形態発生の原因に関連づけることは一層信憑性があるように思われる。しかしながら、名詞形態が数詞との結合から分離して、自由に使用される現象の例は他のスラブ語にはないので、事実による裏付けが不十分であると言わねばならない。

-а 形態発生の原因として考えられるのは、女性集合名詞形、古来自由な双数形として使用されていた、移動アクセントをもった рога, бока タイプの名詞、中性名詞類推の影響、その他の要因の協合によるのであろうか。それとも他のいくつかの重要な要因が歴史の中に埋もれていて、今日においても我々はその実体を確めることができないのであろうか。

現代ロシア語において複数主格語尾 -а は、強力な拡大を見せている。それは主として職業的、俗語的語彙に関わりをもつが、その詳細については次の機会に譲りたいと思う。

## 参 考 文 献

- Борковский В. И. и Кузнецов П. С. Историческая грамматика русского языка. М., Изд-во АН СССР, 1963.
- Булаховский Л. А. Исторический комментарий к русскому литературному языку. Киев, "Радянська школа", 1958.
- Горшков А. И. Старославянский язык. М., "Высшая школа", 1963.
- Соколова М. А. Очерки по исторической грамматике русского языка. Л., Учпедгиз, 1954.
- Филин Ф. П. Происхождение русского, украинского и белорусского языков. Л., "Наука", 1972.
- Черных П. Я. Историческая грамматика русского языка. М., Учпедгиз, 1954.
- Шахматов А. А. Историческая морфология русского языка. М., Учпедгиз, 1957.